教科又は教職に関する科目，自然地理２

地域調査の実践と課題

社会科専修　川瀬久美子

１．授業の概要

地域の自然地理学的な特徴を理解するには、地形図の読図や空中写真の判読のほか、現地調査がある。本授業の目的は、地形図・空中写真の利用法について現地調査を行いながら身につけることであり、土地利用の特徴を地形や水環境の観点から読み解き、その歴史的変化を整理することで、今後の望ましい地域環境や防災についての手がかりを得ることである。

授業内容は以下の通りである。

①地形図の読図作業（等高線・土地利用・新旧図幅の比較など）

②松山市郊外（山麓部・海岸部）のフィールドワーク（河川環境・段丘地形・海岸地形など）

③デジタル地理情報の活用（地理院地図、主題図作成ソフト・MANDARA）

例年、フィールドワークとして愛媛大学城北キャンパス北を流れる宮前川と大川を観察し、宮前川上流の岩堰と宮前川河口の三津浜、大川の河口に近い権現川河口の堀江で、地形や土地利用などの観察を行っている。教員が地形や植生、河川利用の歴史などについて、解説する。

今年度は上記に加え、受講生 12 名が４グループに分かれて、それぞれが宮前川の上流（石手川からの取水口）から下流（三津浜）まで４区間のうち１区間を担当し、地域調査を行なった。

調査内容は大きく３つで、項目（A）はそれぞれの調査地で、河川の名称（呼称）や利用方法（農業、製造業、水運、釣りや花見など)、この川によって発生した過去の災害の認知や河川イメージについて、若年層・壮年層・高齢層から聞き取る。調査項目（B）は、その地域との関係が深そうな施設（寺・公民館・昔から営業している商店・旅館など）を訪問し、調査項目（A）の内容をできるだけ丁寧に聞き取る。調査項目（C）は調査区の河川の景観写真を撮影する。

上記の調査項目の狙いや調査を実施するうえでの注意点などを、調査実施要項として受講生に配布し、口頭でも説明した。各グループがメンバーの都合のつく時間に調査を実施した。メンバー全員（4 人）の都合がつかない場合には２～３人で実施し、単独での調査は行わないように指示し、複数で行う際にも交通事故や犯罪などトラブル回避に留意するよう注意喚起した。

受講生は、調査項目（A）の調査結果は Google Form に入力し、調査項目（B）（C）については Moodle で提出した。調査項目（A）については４グループで住民 44 名から回答を得た。各グループは調査結果を授業で報告し、結果の共有や質疑応答を行なった。

２．地域調査の課題と改善案

１）DP との対応

Ｄ Ｐとの対応についての問いに対する回答を、図１に示す。「思考・判断・表現：教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について，専門的な知見をもとに，その対応方策を理論に基づいて総合的に考え，その過程や結果を適切に表現することができる」と「興味・関心・意欲，態度：教師としての使命感や責任感を持ち，自己の課題を明確にして理論と実践とを結びつけた主体的な学習ができ，自主的に社会に貢献しようとする」の項目では、回答者全員が、「とてもそう思う」「ある程度そう思う」と回答した。

２）地域調査の課題

各グループの調査結果報告の後、地域調査についてコメントを求めた（表１）。地域調査を実施したことで、地域住民と接しながら具体的な人々と河川との関わり（あるいは関わりの希薄さ）を実感し、学びの手応えを感じた受講生が多数いた。地域調査実施上の課題として、地域住民、特に子どもに声かけする際に不審者と思われないような工夫が必要なことがわかった。愛媛大学の学生であることを説明すると、住民からの協力が得やすかったというコメントもあり、「愛媛大学」の腕

章をつけたり学生証のネームプレートを首　　から下げるなどして、改善することができる。

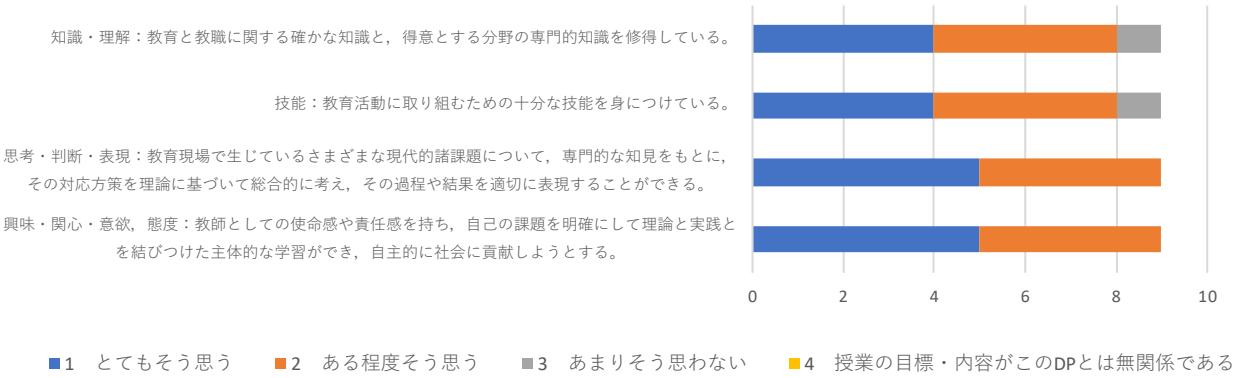

図１　本授業とＤＰとの対応について（単位は人）

表１　河川調査に関する感想・意見（誤字などそのまま）

河川に関する地域調査について
・アポイントメントをとるなどの機会が欲しかった。実施項目Ｂは特に仕事中の人々に話を聞くことが多かったので、迷惑をかけてしまった。近隣住民に話しかけるとき、特に大学から遠いと不審者扱いをされてしまったので、大学の調査であることが一目でわかるような工夫を教師が講じてほしかった。 ・人に話を聞いてもらうことが非常に難しかったが、たくさんの川に対する思い出や願いを聴くことができ、面白かった。 ・地区によって川への認識が違っていたりしていて面白かった。また各班の考察が災害やインタビュー結果からなど多数の視点から考察されていて興味深かった。 ・実際に自分たちの目で川を調査し、その周辺に住む人たちの話を聞いたことで、これまで何となくのイメージしかもっていなかった「宮前川」について詳しく知ることができてとてもよかった。 ・年齢層に偏りが出てしまうので何度か調査が必要であった。道行く人に声をかけるのは勇気がいるけど、皆さん思ったよりも強力してくださった。特に、愛媛大学生であることを最初に伝えると、話を聞いてもらえる確率が上がる。 ・川についての歴史や呼び方、イメージは人によって異なっていることを知り、面白かった。さらに深く調査していくともっと新しいことが分かってくるのではないかと思った。 ・実際に地域を分けて活動をしたり、地域の人に話を聞いたりしたことで、河川の実態に迫ることができてとても良い学びになった。インタビューの際に声をかけただけで勧誘？と思われたことがあったので、聞き方には工夫が必要だと感じた。 ・宮前川に関して興味関心がない点から学んでいく事、フィールドワークの意義を感じられた。また、川の保存将来の利用を見込んでいく為に、どうしていくのか協議の材料になったのではないかと思う。 ・河川敷のフィールドワークに関してはどのようなところを調べ、どのような観点でインタビューをしていきたいのかという全体像を見るためにもいくつか例を事前に見せてくれると良かった。 ・暑い中の調査で大変な部分もあったが、地域の方の声を聴くことができて興味深いと感じることがたくさんあった。声をかけると怪しまれることがあったため、工夫した声掛けが必要であると感じた。 ・調査の際に特に小学生中学生に声をかける際怪しまれたり知らない人についていかないと言われることが多かった。これは自分たちに問題があるのでもなければ子供たちに問題があるわけではない。腕章なり証明できる名札なり（学生証を見せてもよくわかってもらえなかったときもあったので）調査に行く前に統一して何か証明できるものを用意していただけるとありがたかった。 ・地域の方に川についてインタビューするとこれまで知らなった学びが得られてとても楽しかった。来年に向けては小中学生に不審者と疑われることがあったので、愛媛大学の学生であることを証明するものがあった方がよいと思った。